

元木曾山林高等学校教諭 手塚好幸

1) 2杯目のお茶から

— 縣（あがた）正昭さん園原咲也を初めて長野県に知らせる —

長野県松本市在住の縣正昭さんは、園原咲也の生まれ故郷山口村（現、岐阜県中津川市）のご親族以外の方で、咲也の沖縄での活躍ぶりを初めて長野県に知らせていただいた方である。

その縣さんは1827年（昭和2）生れ、長野映研松本支社長をなされた方である。現在ではすでに故人となられたが、生前1995年（平成7）11月11日、ご自宅にお訪ねしてお話をうかがう機会を得、さらに同氏から『信州往来』（1982年〈昭和57〉）5・6・7・8月号に掲載された「沖縄紀行（一）～（四）」のコピーをいただいた。ここでは、それらをもとに咲也が長野県に知られることになった経緯を述べてみたい。

縣さんが仕事の関係で4月上旬に沖縄へ出かけたが、4月とはいえ松本は朝晩寒く霜の降りる日もある。そこで寒くないように身支度（みじたく）をして松本を出発した。ところが那覇に着いてみると暑い、特に歩き回ると汗が出てかなわないので、国際ショッピングセンターの中のすいているお店をさがして、たまたま紬（つむぎ）のお店に入り、半袖シャツを買い求めようとした。店の女性店主はそんな縣さんを見て、さっそくお茶を出して下さったという。もちろん喉（のど）がひどく渴いていたから、まさに恵の水ならぬ「恵のお茶」で、同氏は「地獄で仏に会ったようだ」という。そのお茶がこれまたあまりに美味しかったので、「もう1杯下さい」とお願いし、だされた渋いお茶を2杯、3杯とおかわりをされた。すると彼女は「沖縄へきてお茶をおかわりして下さる方は最高です。」という、喜んで下さったという。

長野県の冬は長い、県北部の新潟県境に接する地帯は豪雪でよく知られているが、中南部は雪が少なく寒風が吹きすさび乾燥する。そこで昔から冬は、炬燵（こたつ）にあたり野沢菜や大根の漬物をつつきながら、お茶を何杯も飲む習慣が生まれたといわれている。県南部の岐阜・愛知・静岡などと接する県境の村々でお茶はとれるが、県内の大半は寒くて栽培は不可能である。そんな長野県ではあるが、お茶好きの県民性が生れたのである（なお園原咲也の故郷旧山口村ではお茶の栽培ができるので、今でも家庭用に作られている）。彼女は長野県民のお茶好きを知っていたのだろうか。

それから彼女の「どちらからですか」の問いに、長野県の松本と答えると「松本はよいところですよってね。私も松本の民芸家具を使っています。」という。こうして彼女との会話は始まった。

これが縣さんと宮古島出身でミンサー織の復興・保存のために自らも染め、機

(はた)を織りその普及に尽力されていた川満教子(のりこ)さん(故人)との出会いである。さらに彼女は縣さんが長野県から来たことがわかると「園原タンメー(「タンメー」は沖縄方言で、親しみを込めて「おじいさん」の意味)をご存じですか、園原咲也さんのことですが。」と彼に聞かれたという。そこで縣さんは「私はその方を知りませんが、その園原さんというのはどのような方ですか」と聞くと、彼女は「園原タンメーのことは、沖縄の人はみんな知っていますよ。」と行って咲也のことを話して下さったという。

これは1980年(昭和55)4月2日のことであつた。この縣さんと川満さんとの出会いがきっかけになり咲也の沖縄での活躍ぶりが、山口村のご親族以外の人々に初めて知られることになったのである。まさに2杯目のお茶から話が始まったのであつた。こうした園原咲也にかかわる話までも、いかにも咲也らしいちよっとユーモラスなエピソードである。

縣さんが勤務された長野映研(株)は、映画の配給・上映業務、視聴覚器材・設置業務などをあつかう会社である。また映画製作にもかかわることがあり若林繁太著『教育は死なず』の映画化を、翼プロダクションと協同制作された会社でもある。同氏はその中で教育映画を担当し、特に学校関係に良心的なよい作品の配給や、そのための営業のお仕事をされていた。当時県内の小・中学校では時々全校生徒による映画会が行われていた。そこへ同社も映画を配給し、縣さんもそれにかかわるお仕事をされていたのである。その時沖縄へ出かけたのは、灰谷健次郎著『太陽の子』の映画化のために沖縄ロケが行われる、というので出かけたという。

この出会いがきっかけで縣さんと川満さんとの手紙のやり取りが始まった。さらに彼女から紹介された経営コンサルタントの名城昇さんが仕事で松本を訪れ、縣さんに会うとやはり咲也のことが話題になったのである。翌81年(同56)3月、今度は縣さんが沖縄を訪れた時には、その名城さんが、咲也の県立農林学校時代の教え子である池宮秀夫さん・座間味定吉さんをさそい、縣さんを迎えて下さった。その彼らから「沖縄県と長野県はすぐ隣同士、親類です。目には見えないうが、何か近いものがありますね」と言われて歓迎されたという。松本空港から出発して大阪で乗り換え那覇に行っても、帰りは大阪で一泊せざるをえないことを思うと、縣さんは彼らの言葉を聞いて一瞬とまどったが、そこには園原咲也の大きな存在があることをすぐに感じとったという。

こうして縣さんは、長野県に親しみをいまく沖縄の人々から咲也のことをさらに詳しく教えていただいたという。その成果を翌82年に安曇郡豊科町(現、安曇野市)にある信州往来社発行の雑誌『信州往来』5月号から、咲也と沖縄について4回にわたり寄稿した。各号の内容は次の通りである。

『信州往来』(1982年〈昭和57〉。信州往来社)

5月号「沖縄紀行(一)教育は生きている」(P.12~13)

6月号「沖縄紀行(二)六月二十三日を前に、観光客は今・・・」(P.10~11)

7月号「沖縄紀行(三)戦争の傷跡と「沖縄びと」の思いやりと・・・」(P.12~14)

8月号「沖縄紀行(四)・・・その後四題・・・」(P.12~14)

翌83年(同58)2月15日には、地元の新報『日刊市民タイムス』紙に「沖縄の園原咲也先生 信州教育は生きている」を寄稿された。その10日後、咲也の母校である木曾山林高校へ縣さんのお手紙と共に、その新聞記事が送られてきた。咲也が亡くなって2年後のことであったが、母校では初めて第1回卒業生咲也の沖縄における活躍ぶりを知ったのであった。

このように縣さんは、まず川満さんとの出会いがあり、それをきっかけに集められた咲也の話を、このように新聞や雑誌などで発信された。その結果、長野県の松本地方や母校では、咲也のことを知ることができたのである。したがって最初のこの出会いは、偶然とはいえ大きな意味を持つものであったといえよう。しかし私はそこには単なる偶然だけでなく、縣さんの沖縄への思い、向き合い方が重要な役割を果たしておられたと思うのである。

縣さんは終戦当時(1945年〈昭和20〉)のことを「私は満18歳、兵役の繰り下げで観閲点呼を受け、第二国民兵役、在郷軍人でもあった」(注1)と述べ、後述する高林さんのように直接兵役に出ることはなかったのであるが、食糧不足で「空腹と疲労」(注2)をかかえていたという。その彼が戦後、沖縄県南部の激戦地を訪ねながら摩文仁(まぶに)の丘へ来て、思いを新たにすることがあった。その思いを『信州往来』6月号で、「すべての文化を破壊し尽くす戦争の罪悪を語る人がいなければいけない」、さらに「摩文仁(まぶに)で死をとげて、ここの樹々に変身した沖縄の友達は、語り言葉で、文章で、映像で語り伝える人になってほしいと私にささやいている」(注3)と述べる。同氏は戦跡を訪ねながら、ご自身の使命を感じられていたのである。そして実際に『太陽の子』や『対馬丸さようなら沖縄』など、沖縄における戦争の実態・悲劇などを映像化した反戦・平和を訴える映画の配給に尽力されていたのである。

このように縣さんは沖縄及び沖縄戦を真摯に見つめていた。それに対して自身も悲惨な戦争体験から命の大切さを訴える川満さんも応じたのである。縣さんによれば(同7月号)、『太陽の子』のロケにかかわるお仕事をされていた同氏に、彼女は灰谷健次郎の原作を読んで次のように懇願したという。

原作の中で主人公の「お父さんは、12歳で皇軍に動員され沖縄南部戦線で自決してゆくひめゆり部隊の女学生を目の前にした、以後自分に勇気があったら女学生の自決をやめさせることができたのにと、三十数年悩み続けて、わが子の成長とともにノイローゼが重くなり自殺する。」(注4)という筋である。それに対して川満さんは縣さんに、せめて映画の中では「お父さんを殺さないでほしい!生かして下さい」(注5)と懇願されたという。

その理由として、宮古島生れの彼女は自身の戦争体験を次のように語ったという。それは彼女7歳のときの宮古島防衛隊の同島駐屯によるにぎやかな島の思い出と共に、その後の米軍の艦砲射撃、日本兵が見せた醜い姿であり、兄の戦死で

あった。さらに彼女の心を深く傷つけたのは戦争終結後の父親の姿であった。当時占領軍は6月から7月にかけて、島に日本軍が貯蔵していた発煙筒を処分し、その煙が幾日も続いた。ところが彼女の父親はその煙の中を毎日、帰らぬ息子を探し回りはじめた。しかも煙の中に我が子だけでなくその友人も苦しんでいると思ひ込み、暴風の日も晴天の日も彼らの名を呼びながら家を出て行った。8歳になった彼女はその父を探しに追いかけたという。さらに父が家にいるときには、彼の飲む泡盛(あわもり)の量が日毎に増えていった。そのような日が続いたが、そのうち父は息子の名も娘の名もわからなくなり、ついには亡くなったという。

彼女は自らの体験と重ねあわせて、たとえ映画の中でも「一人でも殺してはいけない。生きなければいけない。」(注6)ことを縣さんに訴えたのである。映画が彼女の希望通りになったかはわからないが、その思いに縣さんも深く共鳴し共感を抱かれたのである。

たった2杯目のお茶から話は発展したが、これは単なる偶然ではない。なぜならその時には沖縄の本土復帰以来8年がたち、それまでに多くの長野県人が沖縄を訪れていた。その中には園原タメーの話を知る人だっただけでおいでになったかもしれないし、ありえたはずである。しかし咲也のことを沖縄でお聞きした方がさらに彼のことを知ろうとし、かつ母校木曾山林高校にお知らせくださった方を、私は寡聞にして縣さん以外には聞かない。

ところが縣さんはお茶を入れて下さった彼女の、そして沖縄の人々の思いに向き合い、それを真摯に受けとめようとしていたのである。だから沖縄の人々の心の中に生きている園原咲也を教えていただくと、さらに彼のことを知ろうとし、長野県の人々にも伝えようとしたのである。

咲也もまた沖縄の人々に向き合い、その思いをくみ取ろうとしていたことを考えると、縣さんのような方によって初めて園原咲也のことがわかり、長野県の人々に知られるようになったのも宜(うべ)なるかな、である。感慨深いものがある。

注1:「高校教科書検定」(『信州往来』1982年〈昭和57〉9月号P.6)

注2:「沖縄紀行(二)六月二十三日を前に、観光客は今・・・」(『信州往来』1982年〈昭和57〉6月号P.10)

注3:「同上」(『信州往来』6月号P.11)

注4・5・6「沖縄紀行(三)戦争の傷跡と「沖縄びと」の思いやりと・・・」(『信州往来』7月号P.14)

2) このような人こそ書き残さねば

— 沖縄防備にあたった兵士高林市治さん —

元県立松本養護学校長の高林市治さんは、ご自身の戦争体験からもともと沖縄には強い関心をお持ちの方であった。やはり今では故人となられたが、生前1994年(平成6)6月12日、ご自宅にお訪ねしてお話をうかがう機会を得た。さらにその後ではあるが、同氏の御著『旅を栖として』(1992年〈平成4〉)、『近代文学

の研究』(1995年〈同7〉)の2冊(自費出版)をいただいた。ここでは、それらをもとに同氏の園原咲也にかけける思いを述べたい。

まず高林さんの戦争体験である。同氏は戦時中、西筑摩郡(現、木曾郡)檜川(ならかわ)国民学校の教壇に立っていたが、1944年(昭和19)5月赤紙召集令状を受けて入隊。所属部隊は満州国牡丹江ムーリン省関東軍八〇二部隊大嶽隊であったが、同隊は同年7月に沖縄へ移動した。沖縄での高林さんは摩文仁(まぶに)巖頭手前の具志頭(ぐしちゃん)村の安里(あざと)・与座(よざ)・仲座(なかざ)に配属され、一兵卒として軍務に服した。任務は与座岳(よざだけ)周辺から摩文仁洞窟近辺に陣地の構築、塹壕(ざんごう)掘りで、サンゴ礁からできた地面は堅く大変だったが、12月頃までにはほとんど完了した。

このほかに伊江島の飛行場建設、那覇港付近の民家取り壊し作業などに従事したという。同年10月10日、いわゆる十・十空襲と呼ばれる米軍の大空襲を体験し、彼のいた南部戦線一帯はすさまじい機銃掃射にあった。さらに那覇・首里・嘉手納などは壊滅状態に陥っていたという。その後、彼の所属する第九師団は全員台湾への転進命令があり、12月31日出航し翌45年(同20)台湾の基隆(キールン)港に着くが、下船したとたん大空襲に遭う。以後台湾で軍務につき、8月15日終戦を迎えたという。

このように高林さんらの部隊は沖縄で6ヶ月にわたり守備の任務につき滞在したが、その間に彼らを苦しめたのは、堅い大地や米軍の機銃掃射だけではなく、水であったという。それは飲み水でさえわずかな泉の水と天水にたより、洗濯水にも事欠く苦しい生活を強いられたという。

その高林さんは、戦後1979年(昭和54)12月31日沖縄本島へ南部戦線視察と慰霊を目的に奥様と出かけられた。後年、彼はその時のことを前述の縣正昭さんに語るのだが、高林さんは終始白いハンカチで目頭を押さながらのお話であったという。訪ねた所は激戦地であり、多くの住民を含む人々が命を失った場所である。しかも自身の厳しい軍隊生活と水が不足し苦しかった日々、そうした筆舌に尽しがたい思い出が高林さんの脳裡によみがえったのであろう。奥様を連れて摩文仁の大井戸のところへ行き、「ここで生活していたが、台湾へ行ったから生きのびられた。」と語ると、彼女は「こんなところでね、と泣き崩れました」。このように同氏は縣さんに話してくれた(注1)という。

こうした慰霊の旅で、高林さんは新たに二つのことを発見した。その一つは広大な米軍基地の存在である。本土復帰を果たした沖縄ではあるが、今なお基地の中にある沖縄という事実である。もう一つは焼土と化した死の島が、今やうっそうたる緑したたる島によみがえり、豊かな水源に恵まれていることであった。その意味では沖縄が緑豊かな島として、水道の水を豊富に味わえる快いさわやかな旅になったと述懐する。

そしてあれほど水に苦しんだ島が、「水資源豊かにうるおう驚くべき復興の跡、戦火に生き残った島の人々の苦闘の跡がうかがえるのであるが、『かくあらしめた

何かがある』『それは何であったろうか?』(注2)との強い思いを抱かれたという。

その3年後、1982年(昭和57)12月の初めのこと、アニメ映画「対馬丸遭難事件」(1982年制作「対馬丸さよなら沖繩」)の試写会があった。これは縣さん(長野映研)の企画であろう。試写会後、そこへ参加していた高林さんは縣さんと懇談することになった。お二人はもともとお知り合いの仲であり、その時は映画をきっかけ、沖繩戦及びそれにかかわることについて語り合ったという。そのアニメ映画の中で、子どもたちが対馬丸に乗って九州へ疎開するために校庭でお別れの式があり、その場面が出てきた。実は高林さんは、沖繩にいたとき、奇(く)しくもその天姫小学校の校舎の一部に寝泊まりして那覇港近くの住宅・建造物の撤去作業に従事していた。その日は作業中止となり宿舎となった校舎の窓からその式を見ていたのである。その後の対馬丸は途中で米軍に見つかり魚雷攻撃を受けて沈没するという悲劇を生んだ。その映画であり、そのお別れ会の模様を高林さんはありありと思い出したのである。

こうしたことからお二人は沖繩について話が弾んだ。たとえば高林さんは戦中の体験から沖繩の緑化・水問題を語り、縣さんからは沖繩ロケの仕事で行った那覇のお店で園原咲也のことを知ったことなどである。

そこで縣さんは、高林さんが同月中旬に沖繩旅行を予定していることを聞くと、園原咲也の調査を依頼された。もちろん高林さんも沖繩の緑化の問題について強い関心をお持ちであったので、咲也と緑化について調べるべく、縣さんから川満教子さんや咲也と共に植物研究をした天野鉄夫さんを紹介され、さっそく同月15日再度沖繩を訪問し調査を開始された。川満さんの車で辺土名の園原繁さん(咲也は前年に亡くなっていた)を訪ねた。その後那覇にもどり天野さんを訪ね、さらに糸満市に山城幸吉さんを訪ねた。その成果は翌1983年(昭和58)2月、新聞紙面で「園原咲也先生の生涯 荒れ果てた沖繩 緑で覆い尽くせ」(『信濃毎日新聞』全県版2月23日夕刊)として公表され、咲也のことが全県的に知られることになったのである。

その内容は、咲也の優れた植物研究、沖繩で慕われ尊敬されている人間教育者の姿であった。さらに戦後復興のために咲也が「全土を緑に育てよ。パインを植え、はげ山の赤土をシークワサーで覆い尽くせ」と説き続け、数多くの教え子たちが立ち上がり、緑の植林と栽培の実践に取り組んだことを伝えた。

さらに1986年(昭和61)10月8日、高林さんは、今度は縣さんと共に名護市エメラルドセンター社長山城和子さんの案内、専務伊良波幸吉さんの車で、辺土名の園原繁さんを自宅に訪ねた。こうして繁さん・シズさんご夫妻にお会いし取材された。

こうした取材・調査結果を高林さんはまとめられて、1987年(昭和62)7月長野県下で義務教育に当たられる先生方の組織である信濃教育会の機関誌『信濃教育』1208号誌上で、「園原咲也先生の生涯 — 沖繩を緑の島によみがえらせ、

国頭村辺土名の土と化した 一」として発表された。その中で「沖縄の緑化と復興に、そして亜熱帯植物の研究の第一人者として生涯をかけられた園原咲也先生があったこと。その感化によって育った沖縄の青少年が、身を徹して戦後、緑の沖縄をつくり上げた今日のあることがわかった」(注3)とした。そしてその咲也の様子をデンマークの戦後復興を、植林をもとに献身的に指導したダルガス父子(注4)に喩えたのである。

最後に咲也をよく知る天野さんが「園原先生のお人柄や、教育者として、植物学者として、沖縄県民の先達として、その生涯を沖縄にささげられ、緑化の実践者として子弟の育成に精進されたその足跡」(注5)を切々と語られたことに、深く感銘した旨を述べるのであった。

こうして全県下の学校の先生方にも咲也の沖縄での活躍が知られていったのである。なおこの論文は後に『旅を栖として』・『近代文学の研究』にも再録され、そこには現地で集められた豊富な資料もつけ加えられた。

このように園原咲也について沖縄での本格的な調査に当られ、さらに長野県下に広く伝えられたのは高林さんであった。

高林さんはもともと国語の先生で、前掲の御著2冊にはたくさんの文学研究の論文も所収されている。前述したように1994年、私が松本市のご自宅に高林さんをお訪ねした時、咲也についてのお話の最後に彼のことを「こうした本当の教育者を書き残さねばならない。」とおっしゃり、目頭を押さえられていた。同氏もまた咲也に魅せられた文学者であり、同氏の咲也に寄せる強い思いを感じた。それはご自身の戦争という実体験をもとに沖縄と真摯に向き合い、そこに生きた人々の思いに共感するものであったと思う。

縣さんも高林さんも、すでにご逝去されてしまったが、私の園原咲也についての拙い研究は、こうした方々よって切り開かれ築かれた道を歩かせていただくものである。そしてお二人のご尽力に学びたい・倣いたいとするものであり、改めて故縣正昭さん・故高林市治さんに対して、深甚なる敬意と感謝の念でいっぱいになる。

注1：「沖縄紀行(二)六月二十三日を前に、観光客は今・・・」(『信州往来』1982年〈昭和57〉6月号P.11)

注2：「園原咲也先生の生涯 一 沖縄を緑の島によみがえらせ、国頭村辺土名の土と化した 一」(『信濃教育』1208号P.78。1987年〈昭和62〉7月。)

注3：同上(『信濃教育』1208号P.79。)

注4：同上(『信濃教育』1208号P.79。)

1864年デンマークはドイツ・オーストラリアと戦って敗れ、南部の肥沃な国土を取られた。そのため国土は小さくなり、しかも荒廃していた。そのような中一人の工兵士官であったダルガスは復興に立ち上がり、国土の緑化につとめた。彼の仕事は彼の子どもにも引き継がれ、うっそうたるモミの大木が茂る森を国内各地に実現したという。(内村鑑三の講話「デンマルク国の話」)

注5：同上(『信濃教育』1208号P.81。)

(2021年3月24日)